



手をつなぎ 心ふれあう 明るい社会
(同和教育つうしん第8号より)

通算38号 平成22年(2010年)2月22日

発行 長野県教育委員会教学指導課心の支援室
 発行人 町田 暁世
 〒380-8570 長野市大字南長野字幅下692-2
 電話 026-235-7450
 FAX 026-235-7495
 Eメール kokoro@pref.nagano.jp

企業・各種組織・団体・学校等での学習にご活用ください

 **リボンに込められた願いは** 

心を込めた贈り物にリボンをかける風習がありますよね。日本でも工芸的な美しさをもつ水引が、互いの関係を深め合う贈り物に使われてきました。近頃は、ショーウィンドーの一部に飾ったり、自動車の後部にシールを貼ったりしている方もいらっしゃいます。そこにある『人と人とを結びつけるメッセージ』にお気づきでしょうか。

そら色リボン
 性同一性障害への理解を広げる運動のシンボル

オレンジリボン
 子ども買春と小児ポルノ、幼児虐待撲滅運動のシンボル

青いリボン
 北朝鮮拉致被害者とその家族を支援する運動のシンボル

赤いリボン
 HIV感染者やエイズ発症者への理解と支援を広げる運動のシンボル

黄色いリボン
 愛する人、戦地に送られた家族の無事を願う運動のシンボル
 世界中の誰にも平等の光が降り注ぐよう平和を支持する運動のシンボル

ピンクリボン
 乳ガンの早期発見、患者への情報提供、治療後の支援をする運動のシンボル

白いリボン
 思春期の性的少数者の人権を守る運動のシンボル
 いかなる戦争・武力・暴力にも反対し平和を求める運動のシンボル
 妊娠と出産にかかわる疾病と事故から母と子の健康と命を守る世界のシンボル
 阪神淡路大震災で亡くなった方の冥福を祈り、残された方を支援する運動のシンボル



輪状に折った短い一片のリボン。世界各地で、様々な人々が社会運動や社会問題に対してさりげない支援の意志を表しています。多くの組織が支援や配慮のシンボルとするため、複数の運動が同じ色のリボンを共有することもあります。また、一つ一つの人権課題に対して差別や偏見をもっていないというメッセージでもあるのです。
 さりげないけれど、大きな意味をもっているのです。





11月21日(土)伊那文化会館において人権教育フォーラム(主催: H21 人権教育推進のための調査研究委員会)がおこなわれ、人権かるたを使った事例発表がありました。その実践事例を紹介します。

伊那市立伊那北小学校の活用例



1回目のかるた大会。
「わーい、かるただ。」真剣に取り組む子どもたち。楽しんだあとに「お気に入りのふだはどれ？」と先生がたずねました。

「**か**・・・わたしのみようじ、からきの『か』だから」
「**ち**・・・だいすきないぬのえがかいてあるから」
「**せ**・・・みんなが、えがおだから」

どれも1年生らしい発想です。

2回目のかるた大会の後になると、子どもたちは読み札の意味と絵を結びつけて「お気に入りのふだ」を言っています。「**き**...友だちをあそびにさそっている」「**と**...友だちとなかよし」

3回目のかるた大会、札がとれなくてルールを守らず暴れてしまった子どもが出てきました。すかさず人権かるたの意味をみんなで考えます。そして「お気に入りのふだ」を発表する場面になると・・・。

「**る**ーるには ひとつひとつに いみがある」がいい。
「車のスピード、ブランコの順番、ルールを守らなければみんなが楽しくない。かなしい思いをする人が出てきてしまうから・・・」



やがて、暴れてしまった子どもが、「ぼくたちのじんけんかるたを作ってみよう!」と叫びだし、みんなも「それいいね。」と、自分たちの「なかよしかるた」を作ることになりました。



佐久市人権同和課からの事例発表

解放子ども会での活用

解放学習の一環で「かるた大会」を行いました。

最初に、子ども会では、お友だちに「かるた大会」を呼びかけるためのポスター作りをしました。当日は、読み手を交代するなどの工夫をし、取った札について感想を述べあったり、好きな札を大きな画用紙に描いて張り出したりしました。

特に低学年の子どもたちに好評でした。



人権同和教育講座での活用

佐久市では、人権同和教育講座を4回シリーズで、各地区ごとに行っています。

その第1回目にアイスブレイキングの1つとしての利用方法を考えました。かるたの作成者には失礼かと思いつつ、「私なら・・・」ということで、左のようなワークシートを作って自分で絵にあった人権標語を考え、グループで発表しました。

参加者にも好評で、身近な人権について見直すよい機会になりました。

「人権かるたの読み札作り、むずかしかったですが楽しくもありました。」



私なら...

—絵札に合う読み札を作ってみよう—
キーワードは「人権」で

あ

あ ありがとう
みんな笑顔に
なる言葉

あ・い・う・え・お

平成 年 月 日

氏名

あ ありがとう みんな笑顔に なる言葉 (小1)

い

う

い

う

え

お

え

お

『人権かるた』は、文部科学省の委託を受けた*「人権教育推進のための調査研究委員会」が、平成20年夏に長野県中南信地区を中心に作品募集をし、応募総数2,512点の中から、選考の結果、46点を選出して作成したものです。(人権つうしん36号より)

* H20 年度：国立信州高遠青少年自然の家・松本教育事務所・伊那教育事務所・飯田教育事務所・伊那公民館・諏訪市教育委員会生涯学習課で組織されました。
* H21 年度：心の支援室が加わりました。

教育事務所・伊那市公民館 貸し出し用に20組用意してあります。
北信教育事務所生涯学習課 026-234-9552 東信教育事務所生涯学習課 0267-31-0252
中信教育事務所生涯学習課 0263-40-1977 南信教育事務所生涯学習課 0265-76-6861
南信教育事務所飯田事務所 0265-53-0460 伊那市公民館 0265-78-3447



人権かるたは、右の組織・場所で借りられます。

次の組織・施設にも、5組用意してあります。
郡市教育会 松本市教育委員会 松本市総務部人権・男女共生課
長野市視聴覚センター 長野市保健福祉部人権同和政策課

無名校の甲子園出場

部落問題をめぐる差別事件は、いい意味で、いろいろなものを変えるものです。教師を変え、学校や親たちをも変え、思わぬ方向に発展していくものでもあります。

兵庫県立柏原高校（かいばら）の教師だった荒木謙さん（けん）は、地理学の専門家で、文学や歴史、教育学には、まったくの素人であり、部落問題についても詳しくはなかった——と、「ご自分でも言うておられました。

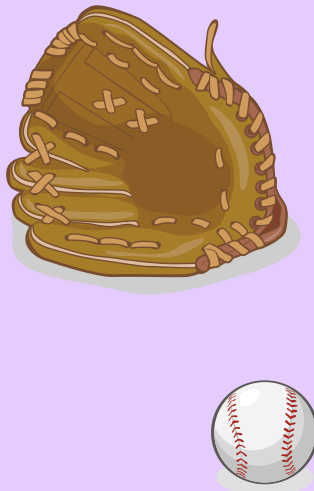
その高校教師が、島崎藤村の名作『破戒』のモデルといわれる大江礪吉（いしかげ）の研究に駆り立てられて、解放出版社から『破戒』のモデル 大江礪吉の生涯』を出版、原田伴彦賞を受賞して大きな反響を呼びました。

この先生を変え、高校の野球部のチームを変えたのは何であったか。それは、かつて自分が勤めていた高校で起こった差別事件でした。

一九七七（昭和五二）年の春、荒木さんは淡路島の高校から兵庫県立明石南高校へ転勤してきました。もともとは女子ソフトボールの顧問を長くつとめ、国体

のコーチもやってきましたが、硬式野球は自分自身でもやったことはなかったそうです。

それが、明石南高校に移った直後に、同校の野球部の監督をやるはめになったのです。野球部員がタバコを吸ったり運動具店で万引き事件を引き起こすなど不祥事があいついで監督が辞任、廃部か休部かの岐路に立たされていたので、新監督として、その野球部再建をまかされたのだそうです。



硬式の野球は素人ですので、主将の決め方は監督の指示ではなく選挙です。その選挙のさいに票が割れたので、一番多く票が集まった野球部員に「おい、おまえが主将をやってくれ」と声をかけたとき、部員のなかから「なんで、あんなやつが……」という声もれてきました。言ったのが誰かは、わかりません。

やがて、そう発言したのは自分が担任をつとめる

クラスの生徒であることがわかり、その真意を聞く
と彼は「先生、あんなあ、君は部落や。そんな
もんがキャプテンやったら、野球しとくない」と告
白しました。重大な差別事件です。そのときに荒木
さんは、ある本に、大江礪吉が仲間の教師から「
えた」の下にはつけない」と反発され、わずか七日
間で小学校から排斥されたと書かれていた光景を
思い浮かべていたそうです。

荒木さんの野球部員に対する「お説教」はその翌
日から毎日七時間も続きました。野球部員の帰りが
遅いので、その事件は親たちにも知られることにな
り、三日目に保護者全員が集まって説明会が開かれ
ました。

その席で、ある父親が立ち上がり、「ええか、み
んな、よう聞いてくれや。ワシも、そついつところ
（被差別部落）の生まれや」「ワシが、どういっ思
いでこの子を高校にやってるか、野球部に入れてる
か、わかるか。ワシが、どんな思いで生きてきたか、
わかるか……」と自分の被差別体験や胸のうち
を語ったときには、親も生徒もウォン、ウォンと泣
き出してしまったそうです。これを機に親たちも学
校も、野球部も変わりました。互いの友情と心意気
は、すごいものがありました。

そのために監督は素人、優秀な野球選手を集めたわけでもない普通の公立高校の野球部が、部落出身の主将を全面的に支えてまとまり、この事件から二年目にして夏の甲子園大会に兵庫県代表として出場できたのです。兵庫県には全国大会で優勝経験のある報徳や東洋大姫路のほか育英、滝川など百七十校近い強豪がひしめきあっています。そのなかで元女子ソフトボール監督ひきいる無名の明石南高校は、堂々と兵庫県の頂点をきわめて甲子園に出場し、三回戦まで勝ち進みました。

その一方で荒木さんは『破戒』のモデル・大江礒吉の研究に夫婦で取り組み、七年がかりで出版にこぎつけたのです。これには後日談があります。

あの阪神淡路大震災があった翌年の正月、甲子園大会出場当時の例のキャプテンから荒木さんのもとに電話がありました。「先生、お元気ですか」「うん、元気だよ。おい、去年は大地震で大変だったなあ」と声をかけると彼は「あるときになあ、先生。やつらが……、やつらがなあ、ああ、ああ……。」と言って電話の向こうで泣いていたそうです。当時、彼は、もう二十八歳になっていました。

彼は「おれは高校を卒業したら人の命を守る仕事をしたい」と神戸市消防局に就職。地震のときはレスキ

ュー隊の隊員をしていました。あの震災で街のあちこちから火の手があがっている最中にヘリコプターから消防隊員がロープで降下して救助作業をする場面がテレビで放映されましたが、その隊員が彼だったのです。職務上、彼は約一か月間も消防局に泊まり込み、自分の家に帰れなかったそうです。

ところが、彼の話によると、彼の家も地震で大被害をつけたことを知った高校時代に甲子園へ行った野球部の仲間が、誰彼なしに彼の家へ行って復旧作業を手伝い、彼の三人の子どもを「うちにも子どもがいるから、うちへおいでよ」と言って、それぞれが面倒をみてくれたというのです。この仲間たちは「あいつは部落の人間や。あんなやつの下で野球なんかできるか」と拒絶反応を示した高校生だったのです。

それが、あの事件を機に変わりました。今では友人というより肉親同然です。団結も固い。彼らは、みんな大変身をしたのです。人間的に目覚めたのです。それがうれしくて彼は電話の向こうで泣き出してしまったのです。荒木さん自身も、うれしさと感動で泣き出してしまい「教師になって、よかつたなあ」と思ったそうです。

甲子園出場二十周年にあたる一九九八年には、全国各地に散らばっている当時の野球部の面々が、久

しぶりに母校のある明石市に集まり「あのころ」を語り、荒木元監督を囲んで「ちそうを食べ、酒を飲む会をしたといえます。差別事件を契機に生まれた友情と信頼感、団結の力は、今もなお脈々と生きているのです。

荒木さんは言います。「自分も生徒も、あの差別事件で目覚め、人間が変わった。親たちも変わったはずだ」と……。そして、教員生活をふりかえって「あの事件までは知識を切り売りするスーパーでしかなかったことが恥ずかしい」と自戒の弁を語っています。



この作品は、著者の田村正男氏と(株)解放出版社様の御了解をいただき、次の書籍より転載させていただきます。

著者名 田村 正男

書名 人権反射鏡 裏から見える風景

出版社名(株)解放出版社

〒556-0028 大阪市浪速区久保吉1-6-12

TEL 06-6561-5273 / FAX 06-6568-7166

身近であった

あんなこと こんなこと PART 2

PART 1は、人権つうしん36号に掲載しています。

ポツリと語った後藤さん

後藤さんは、もうじき米寿に近い。小学校時代を思い出し、ポツリと語った。
「担任も軽い気持ちで言ったことは分かる。しかし、その担任に会いたいとは思わない。名前をもじっての『ゴウトウ(強盗)』は悔しかったよ。」と。

笑うトップリーダー

「少子化に対するビジョンをお聞かせください。」地域のリーダーの集まりでの公式な質問でした。
「なんと言っても、最近の若い衆はだらしなくて。子どもをたくさん生めないから・・・」と笑うトップリーダーの姿、目に焼きついています。

本音はここに

ピンの回収当番になりました。リサイクルセンターで空ビンを持参して下さる皆さんと会話を交わしながら楽しく作業をしていました。
一人の方が透明のピンのコンテナの中にグリーンに分別するべきビンが混じっていることを指摘してくれました。以前、資源回収の仕事にかかわりをもっていた方だそうです。言われてはじめてその酢の空ビンは薄いグリーンとわかりました。
その時、
「あのもんは、分かったような口を利いているが、実はよそ者で、まだ何も分かっていないくせに、ちょっと生意気なんだ」と一人の当番の方がささやきました。

前に進もうとすると・・・

今まで女性が足を踏み入れることがない分野に挑戦した人がいた。
「私の一步が社会を変える一步になってくれれば・・・」そんな熱い思いを語ってくれた。
後日、彼女が受けた誹謗中傷の言葉のひとつ。
「女のくせにあんなことするなんて・・・」
女性からのものだったという。

私は女優なのに・・・

美しく着飾った方がインタビューに応じている。
「聞いてください。私、女優なのに風呂もないところへ泊まらされて・・・」とロケの不満を語る。
さらにタイプの男性とは尋ねられ「バカでもかっこいい人。チビでもやさしい人・・・」と言葉は続く。

今でも忘れることがないんです

人権研修会終了後、一人の方が、「ちょっと私の気持ちを聞いてください。」と近づいてこられました。
「私は、70歳を越えて久しい者です。社会はだいぶ変わりましたが、実は今でもいつどこで被差別部落出身者として差別されるのではないかと、ずっとおびえているんです。いつときも、そのことを忘れることがないんです。苦しいものです・・・。」
私にとって、忘れることができない一言です。

アナウンスへの助言(?)

「前庭に駐車してある長野、(車種)を大至急移動してください。」
場外で聞いていた一男性が、
「こんな呼び出しじゃ、女にはピンとこないよ。ナンバーなんか覚えてないさ。」と間髪を入れず笑う。
当日は女性のための会議でした。

誰のための・・・

ある町の老人福祉センターでのこと。トイレから出ると80代くらいの女性が半分ズボンを下ろし、私が出るのを待っていた。そのトイレを見て、
「あっ、ここも腰掛けるのじゃないんだね。」とつぶやきながらそのトイレに入られた。
3つ並んでいたトイレは、どれも和式のものでした。

こんな言い方してる??

途上国の女性が数名、川原の大きい石を利用して洗濯をしている。すでに洗い終わった物をカゴに入れ頭にのせて去っていく人もいる。彼女たちの会話が次のようなテロップになってテレビ画面に映し出されている。
「ね、あんた知ってた？」
「やあだ。あたいそんなこと知らないよ。」
テロップに不快を感じた私です。



ここに紹介するのは、市町村における人権教育担当者や、講師として研修講座を担当されている、いわゆるリーダーの皆さんのつづきです。

地域の人権課題を的確にとらえた内容で、かつ参加者に満足していただけるような研修講座を作ろうと、リーダーさんの悩みはつきません。どんなネタで、何を考えていただければよいか、等々・・・。

身のまわりの出来事を、いまいちど「人権」という視点からとらえ直した時に・・・、見えてきたことがありました。

食品についてこんな取組みが始まった地域もあります。



長野県リサイクルキャラクター
クルルん

長野県環境部廃棄物対策課では、飲食店や宿泊施設等から排出される食品残さ(生ごみ)の発生抑制を進めるため、平成21年度、諏訪市をモデル地域とした「食べ残しを減らそう」推進事業を始めました。

賛同いただいたお店では、次のように取り組まれています。

小盛メニュー等の導入
持ち帰り希望者への対応
お店の形態やお料理に合った独自の取組み

「一人ひとりが無関心では何も始まらない」ことなど、環境問題と人権問題は、取組みの方向性において共通していることがたくさんあります。

環境にも、人にもやさしい社会をみんなで作っていきましょう。



評判のお店

評判を聞いて初めて入ったお店で食事をしたときの出来事でした。子どもと久しぶりの外食で自分の好きなメニューを注文して、今か今かと楽しみに待っていた時のことです。

私たちの前に食事を済ませた人が、食べ残した品を持ち帰りたいというので、パックをアルバイトの店員からもらい持ち帰ったらしいのです。

突然、店長が大声で店員をしかり始めたのです。その場に居合わせた私たちも美味しくないはずの食事がのどにつかえるような思いがしました。私たち家族は食事もそこに済ませその場を去りましたが、いつまでも大勢のお客さんの前でしかられた店員さんのことが気になりました。

残した品の扱いについては難しい面があることも知っていますが、叱る場所とタイミングがあると思います。今回は仕方ないけど、次回はこれのようにするべきと店の方針を指導すべきだと思いました。食中毒の心配を考えたのであれば、お客さんに話を話し、早めに食べることをお願いできたらかと思うのです。

店員さんのあの場で受けた心の傷を思ったとき、何ともやりきれない思いです。居

合わせた私たちは、黙って見過ごしてよかったのか、今でも悔いが残ります。

かけがえのない一人ひとりに、誠実で対等な立場で接し、そのことを宝に思える人間になりたいと思いました。

時間

『定刻前なのに遅刻の雰囲気』という新聞への投書を読んだとき、似たようなことが地域や隣組等、自分の周囲にもあるなと思いました。

事例 地区で年二回行われている八時からの道普請、一〇分前到着でも一番遅い口(くち)、皆さんすでに黙々と作業を始めています。

事例 隣組に不幸があり、葬儀等の段取りを決めるときのこと。平日の急なことであり、仕事先から五分前に駆けつけてさえ、「この一大事に遅いぞ」といった雰囲気があり、居心地の悪さを感じたことがあります。

事例 ある催しで関係者が会場準備にきています。二三分前で、まだ一人名みえていないようですが、「いいい。いいい。なからそろそろで、始めましょ。そのうちそろそろわ・・・」と、若い担当者が圧倒されてしまつ勢いです。

「まだ時間ではありません。時間になったら始めましょ」と言い出せない自分がいいます。たとえ言ったとしても、「何言ってるんだ。早く始めて早く終わらす、みんな忙しいんだから・・・」と一蹴されてしまつそうです。でも、おかしい。何か変です。

分館の人権学習会の折などに皆さんに考えていただくと思います。

はほえみの意味

十四年ほど前、母国のブラジル、ペルーから日本へ来た子どもたちと学ぶ機会を与えられました。

言葉の通じない異国で、来日当初の子どもたちは身体が硬直してしまつような緊張の日々を強いられていたことでしょう。そんな子どもたちの救いは、明るく親切に接してくれるクラスの子どもの存在でした。身振り手振りで言葉の壁などなんのその、すぐに仲間を迎え入れる友達にほつとしたことでしょう。

ところが日本語の習得が進むに従って、子どもたちに変化が見られてきたのです。

日本語で話すことを執拗に要求されると、私たちには理解できない母国語で返答するようになりました。次第に所属学級の授業に参加することを渋り、母国語で自分の気持ちを伝え合える仲間がいる日本語学級にとどまるつとずるのです。

その原因を調べる中で、思いがけないことが分かってきました。

級友たちと少しでも摩擦を避け、うまくやっていく方法を彼らははほえみに求めたのです。

後日、ある生徒が話した一言に、私は大きな心の隔たりを感じました。

「さんは、何を言っても黙ってにこにこしているばかりなんです。最近はいはほえみで『ちょっと気味悪いわね』とうわさしあっているんです」

グループで話し合ってみましょう

あなたイクメン？



イクメンじゃない。イクメンだ。めざせ、イクメン。」「イクメンはもてる。」「こつしたフレーズを耳にするようになった。育児(子育て)に積極的な男性を指す流行語である。

子どもと一緒に遊んだり、掃除、洗濯、料理したりする技能を身につけるためのイクメン講座や父親講座が盛況だという。非常に結構なことではないか。家庭に目を向けない父親が子どもや妻に大きな犠牲を強いているという指摘はまんざら間違いではないと私も思っている。

先月、中学一年生の息子の授業参観日があった。教室の後ろには「おかあさん」方が五、六人、「おとうさん」は私だけ。参観授業のあとは、体育館でPTA講演会。保護者は全部で二〇〇人くらいいたと思うが男性は私を含めて二人だけ。もう一人の男性はPTA会長さんだったのだろうか。「男女共生社会」とか、「育児にも参加できる働きやすい職場」とか、「ワーク・ライフ・バランス」とかよく言われるが、世の中は一向に変わってこないとき思った。なぜ授業参観日に男性はほとんどいないのだろうか？

先日隣の組の人権教育研修会。テーマは「男女共生」。ある男性参加者が言った。「男が子どもでも産めるようにならない限り、男女共生なんて無理。男は仕事で、女は家庭で何が悪いのか。我が家では夫婦で分担して互いに納得して、ずっつとそうしてきた」と。

これをお読みの皆さんはどう思いますか？

イクメン講座に通う若いお父さんたち、子どもさんが中・高生になって子育てに励んで、世の中を変えようよ。夫婦も子どもも元気が出る家庭をみんなでつくりたいと思うから。

おばあちゃんのふしぎなバッグ

文部科学大臣賞

新井 深月さん(7歳) 埼玉県秩父市

わたしは、おばあちゃんが大スキです。出かける時は、いつもおばあちゃんもいっしょです。おばあちゃんは、とてもふしぎなバッグを持っています。どうしてかという、わたしのほしいものがあるところまでくるからです。はじめてころんだけをしたら、バッグから、さつとカッターパンとしょうごくえきがでてきました。

「さむいなあ。」
「さむいたら、
「これきるっ。」

と、おばあちゃんのふくがでてきました。わたしがきたら、こつとみたいになつてもあったかかったです。

ある日、川にあそびにいった時、くつ下がぬれてしまいました。どうしようとおもっていたら、くつ下がでてきたのでびっくりしました。あんなに小さいバッグになんでも入っていてふしぎです。わたしとママで、

「おばあちゃんがいるとたすかるね。」

といいました。わたしも大きくなったら、そんなふしぎなバッグをもって、こんどはおばあちゃんのほしいものをだしてあげたいです。おばあちゃん、いつまでもながいきをしてね。

家族のきずな



右の文章は、平成21年10月に開催された文部科学省主催「第21回全国生涯学習フェスティバルまなびピア埼玉2009」においてモラロジー研究所が行った「家族のきずなエッセイ募集」の優秀作品です。

財団法人 モラロジー研究所
心を育てる月刊誌
「ニューモラル」
NO.484 より転載